

## ダビデの歴史に見られる霊的な原則、命の学課、聖なる警告

聖書：サムエル上 16:1—サムエル下 24:25．使徒 13:22，36

- I. わたしたちはダビデの歴史において(サムエル上 16:1—サムエル下 24:25)、神の主権と、ダビデが十字架の学課を学んだことを見る必要があります：
- A. ダビデは神の主権の下で、神に信頼することとゴリアテを打ち破ることに  
おいて、テストされ、良しとされました——サムエル上 17:1-58：
1. ダビデの羊飼いとしての経験によって、彼は主に信頼するよう訓練されて  
いました。ですから、彼はゴリアテの挑戦を聞いたとき、サウルに言  
うことができました、「あなたのしもべは父の羊の番をしてきました。獅  
子や熊が来て羊の群れから小羊を取ったとき、わたしはその後を追っ  
てそれを討ち、小羊をその口から救い出しました。それがわたしに立  
ち向かってくるとき、その鬣をつかんで打ち殺しました。……わたしを  
獅子の爪から、また熊の爪から救い出してくださったエホバは、わたし  
をあのペリシテ人の手からも救い出してくださいませ」——サムエル上  
17:34-37。
  2. ダビデはゴリアテに、「エホバが救われるのは剣や槍によるのではない  
……。この戦いはエホバのものであって、彼はおまえたちを必ずわれわ  
れの手へ渡されるからだ」(サムエル上 17:47)と告げました。ダビデは出  
て行って、ゴリアテに対して戦い(40-48 節)、ゴリアテの額に石投げで石  
を投げて、ゴリアテ自身の剣で彼の首をはねることによって、彼を殺し  
ました(49-54 節)。
  3. ゴリアテに対するダビデの勝利は、神がダビデを選び油塗ったことに対  
する強力な確証でした。わたしたちがダビデの経験から認識する必要が  
ある事は、今日わたしたちはキリストを追い求めているので、わたした  
ちの環境のあらゆる面が、絶対的に神の主権ある御手の下にあるとい  
うことです——マタイ 10:29-31．詩 31:14-15 前半、39:9．ローマ 8:28-29．  
イザヤ 45:15。
- B. ダビデは神の主権の下で選ばれて、現在の王であるサウルの従者になりま  
した。これら二人が一緒にされることによって、サウルは神のみこころに  
反対する者であることが暴露され、ダビデは神の心になかった人であるこ  
とが明らかにされました——サムエル上 18:6-11 前半：
1. ダビデがサウルとの関係においてテストされたことは、ダビデが絶えず  
十字架につけられていたことを意味しました。サウルが遣わしたあらゆる  
所で、ダビデは知恵をもって行動したので、サウルはダビデを戦士た

ちの上に立てました。あるとき、ダビデがペリシテ人を討って帰って来たとき、イスラエルのすべての町から女たちが出て来て、歌い合いました、「サウルは千を打ち倒し、ダビデは万を打ち倒した」——サムエル上 18:5-7。

2. この称賛は、ダビデには影響を与えませんでした、サウルには影響を与えました。ソロモンは言いました、「人は自分に与えられる称賛によって試される」(箴 27:21)。サウルは激しく怒り、ダビデをねたみました。これは、彼が完全に肉の中にあり、絶対的に自分自身のためである人であったことを示していました。その日から、サウルはダビデを殺そうと決心しました。そして、ダビデには隠れる所がありませんでした。サウルは、ダビデをねたむだけでなく、自分自身の名を損なわずにどのようにしてダビデを殺すか策略を立てるまでになりました——サムエル上 18:10—20:42。
3. サウルがダビデを殺そうとしたとき、ダビデは戦ったり、何かを行なって自ら復讐ふくしゅうしたりしませんでした。彼はただ逃げました。復讐し反撃することは、肉の事柄です。肉の事柄を実行する者は、神の王国に何の分もありません——サムエル上 18:11. 参照、ローマ 12:19. エペソ 4:26. ガラテヤ 5:21, 24。
4. ダビデは、心から神の権威を知っている人でした。サムエル記上において、サウルがダビデを殺すために、ダビデを荒野で追いかけたのを見ます。ダビデには、サウルを殺す機会がありましたが、神を畏れ、神によって案配された神聖な秩序くつがを覆そうとはしませんでした——サムエル上 18:6—26:25。
5. もしダビデがサウルに反逆していたなら、ダビデは民に対して、神が定め油塗った王に敵対する反逆の事例となっていたでしょう。ダビデの態度は、自己を否み神の権威に服従する態度でした。
6. サウルは神に不従順であり、神によって拒絶されました。しかし、これはサウルと神との間の事でした。ダビデに関しては、彼は神の油塗られた者に服従しました。これが、神の御前での彼の責任でした——サムエル上 24:4-6. 26:9, 11. サムエル下 1:9-16。
7. もし何人かの人たちが代価を払って、十字架の下で生きることによって十字架の砕きを経験し、自分の天然の命と性情を知り対処し、肉を死に渡し、神の御前で自分自身を否むなら、彼らは確かに神の権威を知り、神の権威をもたらすことができるでしょう。これが、基本的な原則です。

8. 新約の認識によれば、ダビデは毎日どんな状況の下でも、十字架を担いました。ピリピ第3章10節が示しているのは、わたしたちが十字架を担う力は、キリストの復活の力であるということです。キリストはわたしたちの中へと入って来て、わたしたちの中で生きており、わたしたちの内側で十字架を担っています——参照、雅2:8-9, 14。
  9. ダビデは十字架の学課を学んでいたとき、ヨナタンとミカルと共にある神の備えを享受しました。彼らがいなければ、ダビデにはサウルから逃れる道がなかったでしょう——サムエル上20:1-42, 19:11-18。
  10. 神の主権の下で、ダビデは十字架の学課を受け入れました。そして最終的に彼は、敗者ではなく、獲得する者また勝者であり、苦しむ者ではなく、享受する者でした——ピリピ1:19, 3:8-9, IIコリント4:7, 16-18, 参照、2:12-14。
  11. ダビデの生涯は、砕かれることの生涯を表徴します。外なる人が砕かれることは、わたしたちの天然の性情、すなわち自己が砕かれることです。聖霊の管理の目標は、わたしたちが砕かれた人になることです。神はわたしたちを、完全な不能と無力との場所に置きます。それによって彼は自由な道を持って、彼ご自身と彼の計り知れない豊富すべてをわたしたちの中へと造り込むことができます——IIコリント1:8-9, 4:16-18, 12:9-10, ホセア6:1-3, ローマ8:28-29, 参照、ヨハネ12:3。
- II. ダビデは、地上における神の住まい、すなわち、神の箱の住まいを顧慮しました——サムエル下6:1—7:29, 詩132:1-18:
- A. 神は、ダビデが宮を建造することを望みませんでした。ダビデは、建造する者、敷地、宮の建造のための材料を備えました。神はまたダビデに対して、ご自身の霊によって宮の型を啓示しました。そしてダビデは死ぬ前に、この型を自分の息子ソロモンに与えました。このようにして、ダビデは自分の務めを果たし、宮の建造の完成のために神と共に同労しました——サムエル下8:11, 列王上7:51, 歴代上22:14-16, 29:1-5, 28:11-19, 使徒13:22, 36。
  - B. ダビデは、神のために宮を建てることに熱心でしたが(サムエル下7:1-3)、神はダビデの良い意図を拒絶しました。神は預言者ナタンをダビデに遣わして、言いました、「あなたはわたしのために、わたしが住む家を建てようとするのか?」——サムエル下7:5:
1. これが示しているのは、召会におけるわたしたちの働きと奉仕のすべては、神によって開始されなければならない、また神の願いにしたがって

なければならぬということです。何であれ人によって開始されたり始められたりするものは、それがどれほど神のためであるかにかかわらず、キリストの臨在に欠けた宗教的な活動です。

2. 神に仕えるというわたしたちの心は、受け入れられます。しかし、神のために何かを行なうというわたしたちの決定は、受け入れられません。神はダビデに、「あなたは……するのか？」と言いました。神は、わたしたちに神のためにどんなことをも決定してもらいたくありません。
- C. ダビデは、神を畏れ神と協力した者であったので、神がナタンを通してダビデに、宮を建てる者になるという決意をやめるよう告げたとき、ダビデは反応しませんでした。宮を建てるという自分の願いを遂行することをダビデがやめたという行為は、大いなる事です。M・E・バーバー姉妹は言いました、「神のために働くのをやめることのできない者はすべて、神のために働くことはできません」(命と召会を知る(下)、第16章)——ルカ 10:38-42。
- D. ダビデがやめたことは、宇宙において二重の証しを立てました。この二重の証しとは、第一に、宇宙におけるすべての働きは、人からではなく神から来るべきであるということです。第二に、重要なのは、神が人のために何を行なうかであって、人が神のために何を行なうかではないということです——サムエル下 7:11-14 前半, 18, 25。
- E. 神はただわたしたちの協力を求めるということ、わたしたちは内側深くで学ばなければなりません。神は、わたしたちが神のために何かを行なうことを必要としません。わたしたちは自分の意見、決定、考えすべてを停止しなければなりません。わたしたちは、彼に語っていただき、彼に入ってきていただき、彼に命じていただく必要があります——マタイ 17:5。
- III. ダビデに対する神の懲罰の裁きの記録は、今日のわたしたちに対する警告として書かれています(I コリント 10:11)。神は、愛しあわれみ深いだけでなく、公正で畏るべき方でもあります。神はダビデを赦しました。しかし、神はまた神の統治上の義にしたがってダビデを取り扱い、懲らしめました(サムエル下 12:10-14) :
- A. イスラエルのすべての敵が征服され、ダビデがイスラエルの王として高く上げられた後、ダビデは平安に満ちた状況にあったときに大きな罪を犯しました。それは<sup>かんいん</sup>姦淫と殺人です。これが示している事は、いつであれわたしたちが平安に満ちた状況の中で安楽にしているとき、わたしたちは容易に誘惑されて、自分の肉にふけるということです——サムエル下 11:1-27。

- I ペテロ 4:1 とフットノート 4。
- B. ダビデの罪は、彼が目の欲と肉の欲とにふけた結果でした(サムエル下 11:2-3)。ダビデは、自分の王職の権力を乱用して(4-5 節)、強奪によって故意に姦淫を犯しました。
- C. ダビデはそのような行為を犯した後、装いによって自分の邪悪な行ないを覆おうとしました(サムエル下 11:6-13)。そして、彼はヨアブと共謀することによって、自分の忠信なしもベウリヤを殺し、ウリヤの妻を奪い取りました(14-25 節. 12:9)。
- D. ダビデは彼の一つの罪によって、十戒の後半の五つを破りました(出 20:13-17)。彼の罪は、神に対する大きな侮辱と違犯であり、彼の過去の達成すべてをほとんど無にしていきました。
- E. ダビデは神の心になかった人であり(サムエル上 13:14)、王職の時代を開始する道を神に与え、神の来たるべきキリストのために地上に神の王国を確立しました。しかし彼は、肉の欲にふけるという事柄において失敗しました(列王上 15:5)。この事柄において、ダビデはルーズで、神に対する彼の霊的な追求における高い達成を犠牲にしました。これは、わたしたちすべてに対する警告となるべきです。
- F. とても残念なことに、ダビデは、あの邪悪な者に誘惑された重大な時に、自分の情欲に対する強い抑制を行使せず、かえってそれにふけり、ひどい罪を犯して、神を極みまで怒らせました。
- G. 神はダビデを愛しましたが、ダビデは彼の罪のゆえに、彼の立場と地位、そして十二部族のうちの一十部族を失いました(サムエル下 20:1-2)。ダビデの罪は、ソロモンの腐敗の種をまき(12:24)、それは神の与えた王国を分裂させることになりました(列王上 11:9-13. 12:1-17)。ダビデの罪はまた、王職におけるソロモンの子孫の腐敗の種をまき、それは最終的に、国と彼らの父祖の聖地を失うことになり、聖なる民が捕囚にされることになり、世界中にまき散らされて平安がなくなることになり、現在に至っています。
- H. わたしたちがダビデの歴史から見ることは、神の統治上の御手に陥ることが厳粛な事柄であるということです(サムエル下 12:10-14)。ダビデは神との交わりをととても速く回復しました。しかし、彼が死んだ後にも、神の懲らしめは続きました(15 節後半—20:26)。
- I. 自分の罪を告白することを通して、ダビデと神との交わりは回復されました。それは詩篇第 51 篇に啓示されているようにです。しかし、彼は神の統治上の御手の下に置かれました。彼の失敗の後、多くの邪悪が、近親相姦<sup>きんしんそうかん</sup>、

殺人、反逆を含めて、彼の家に起こりました——サムエル下 12:15 後半—  
20:26。

- J. 神がダビデに対して厳しい懲らしめを行使したのは、彼の罪がとても邪悪であったからです。ダビデの家におけるかつてない邪悪の源は、ダビデが肉の情欲にふけたことでした。これが示しているのは、神を愛する者たちに対する神の懲らしめと統治上の対処が、彼らの子供たちにまで影響を与え得るということです。
- K. これは、わたしたちとキリストとの関係において、わたしたちに対する厳粛な警鐘と警告になるべきです。わたしたちが何であるか、わたしたちが何を願うか、わたしたちが何を行なおうとするか、わたしたちがどのように振る舞うかは、わたしたちがキリストの中にとどまって、彼の計り知れないすべての豊富にあずかって享受することと、大いに関係があります。もしわたしたちがこれらの事柄のいずれかにおいて神に対して正しくないなら、わたしたちの享受としてのキリストを失うでしょう。
- L. すべてを含むキリストは、わたしたちの住まいであり、すべてを含むわたしたちの良き地であり、わたしたちの享受のためにわたしたちが必要とするすべてです。もしわたしたちがキリストとの関係において正しくなければ、彼はわたしたちを彼ご自身から吐き出して、もはやわたしたちに彼を享受させないでしょう——レビ 18:25. 啓 3:16。
- M. 最終的に、ダビデは年老いただけでなく、衰えていきました。ダビデの一生には良い開始があり、明るい太陽が昇るようでした。そして彼の人生と経歴は、真昼に輝く太陽のようになりました。しかしながら、彼が情欲にふけたことは(サムエル下 11:1-27)、彼の経歴を台無しにし、彼の輝く一生を夕方の日没のように衰えさせました。ダビデの晩年には、明るい、卓越した、光り輝くものは、何もありませんでした(列王上 1:1-4. 参照、申 34:7. 創 48:14-16. 箴 4:18)。
- N. クリスマン生活は、神の統治を学ぶ生活です。わたしたちは、自分がまくものを刈り取ります。わたしたちが他の人たちに対して寛大であればあるほど、ますます神もわたしたちに対して寛大になります。もしわたしたちが自分の兄弟たちに対してつらくあたり、厳しくするなら、神もわたしたちに対してつらくあたり、厳しくするでしょう。他の人たちが病気であったり、困っていたりするとき、それはわたしたちが彼らを助ける時であって、わたしたちが彼らを批判する時ではありません——ガラテヤ 6:7. 1テサロニケ 5:14-15. ルカ 6:36-38. マタイ 7:1-2:

1. わたしたちは、寛大で赦す人になることを学ばなければなりません。もしわたしたちが他の人たちに対して厳しくあるなら、神もわたしたちに対して厳しくあるでしょう。わたしたちは、批判したり、罪定めしたり、軽々しい方法で他の人たちについて語ったりすることを避けるべきです。わたしたちが批判したり、他の人たちについて不注意に批評したりすることは、しばしば自分自身に対する裁きとなります——6:15. 18:23-35。
2. 今日、みじめに倒れている兄弟たちが多くいるのは、ただ一つの理由によります。すなわち、彼らは過去、他の人たちをととても厳しく批判したのです。そして、彼らの今日の弱さの多くは、まさに彼らが過去に批判したその弱さです。
3. わたしたちが召されたのは、他の人たちを祝福するためです。ですから、わたしたちは祝福された人として、いつも他の人たちを祝福すべきです。それは、わたしたちが祝福を受け継ぐためです。わたしたちが他の人たちに与える祝福を、わたしたち自身が受け継ぐのです—— I ペテロ 3:8-11. マタイ 10:13. 参照、民 6:22-27。